

紹介

優れた授業実践のための7つの原則に基づく 学生用・教員用・大学用チェックリスト

中島英博、中井俊樹
(名古屋大学高等教育研究センター)

(キーワード：教授法、授業改善、実践手法、ファカルティ・ディベロップメント)

The Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education and Inventories for Students, Faculty and Institutions

Hidehiro Nakajima and Toshiki Nakai
(Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University)

(Key words: teaching methods, teaching improvement, practical examples, faculty development)

1. はじめに

大学教育の質の向上のために、これまで教育学研究者は研究成果の発表を通じて貢献してきた。具体的な成果の一部は、大学教授法の領域における研究開発物の提供である。例えば、マッキーチ⁽¹⁾やデイビス⁽²⁾などによるハンドブックの提供が、その代表的なものである。日本においても、香取らが米国で発表されたハンドブックの翻訳を提供するだけでなく⁽³⁾⁽⁴⁾、池田らが日本の文脈にあわせて編集したハンドブックの提供を行っている⁽⁵⁾。近年では、各大学がそれぞれのニーズや課題に沿って独自にハンドブックをまとめ、ファカルティ・ディベロップメントを通じて普及する活動が、盛んに行われている⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

こうしたハンドブックにおいて共通に見られる特徴は、教員の教授スキルの向上に主眼をおいている点である。これは、教育実習もなく教員としての研修を受ける機会を与えられないまま教員となった大学の研究者に対して、自学自習用の教育学のテキストを提供する試みと言ってもよいだろう。

一方これらのハンドブックでは、教員が新たな内容を学ぶという点で、教員にかかる負担を大きくするかもしれない。例えば、インストラクショナル・デザイン、コースパケット、ティーチングポートフォリオなどが、教員にとって初めて接する概念やノウハウである場合、それがどのような

ものか、なぜ大事なのか、どのように実践すればよいのかについて初歩から学び、実践に結びつけていかなければならない。またハンドブックには、比較的抽象的な教授法の説明も少なくない。例えば、「導入部は刺激的に、展開部はスリリングに、エンディングは印象的に」、「初日の授業では学生のニーズを把握しよう」、「質問や発言を上手に促そう」という説明があったとしよう。こうしたノウハウは重要であるものの、それを知ることが即座に教員の実践に必ずしも結びつくとは限らないだろう。これらのハンドブックが果たす役割は大きいだが、抽象性の高い「教授法の理論」と同様に、それを実現する「実践手法」の提供も現場の教員にとっては重要である。

本稿では、米国で大学教育の現場で求められる実践手法をまとめた資料、「優れた授業実践のための7つの原則」(The Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education)を紹介する。日本においても現場の教員が、少ない負担で実践に結びつけられるような授業改善ノウハウを提供する取り組みを進める際に、「7つの原則」は有用な資料となるだろう。

2. 「優れた授業実践のための7つの原則」の開発成果とその特徴

「7つの原則」は、1980年代後半から米国高等教育学会(American Association for Higher

Education)の下でチッカリングとガムソンを中心とした研究グループによって開発されたものである⁽⁹⁾。7つの原則とは、具体的には次の7つを指す。

表1「優れた授業実践のための7つの原則」

- | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 学生と教員のコンタクトを促す 2. 学生間で協力する機会を増やす 3. 能動的に学習させる手法を使う 4. 素早いフィードバックを与える 5. 学習に要する時間の大切さを強調する 6. 学生に高い期待を伝える 7. 多様な才能と学習方法を尊重する |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

この成果は、全米の大学関係者の中で最も認知度の高い教授法であり、現在でも全米をはじめ世界の多くの大学で活用されている。開発成果は、87年に発表された「7つの原則」をまとめた小冊子(以下、「7つの原則」と呼ぶ)⁽¹⁰⁾、その実践手法を教員・大学組織へ向けてまとめ89年に発表され2つの小冊子⁽¹¹⁾⁽¹²⁾、92年に発表された学生向けの小冊子⁽¹³⁾(これら3冊を以下「チェックリスト」と呼ぶ)の合計4つの冊子にまとめられている。

携帯に適したサイズで、安価かつ簡素な製本で十数頁にまとめられたこれらの冊子は、米国、英国、カナダで20万部以上配布され、発表直後は全米の半数以上の大学において、教員研修などで活用された実績がある⁽¹⁴⁾。

開発者であるチッカリングとガムソンを中心とする研究グループの問題意識は、学士課程教育の質的向上を効果的に促進するための方法論にあった⁽¹⁵⁾。彼らは、教育学を専門としない多くの教員が教育に関する議論を煩わしく思っている現実に直面していた。そのため、教員にとって理解が容易、実践的な内容を含む、資料として活用しやすい形、幅広い分野の教育に応用できる、といった特徴を持つ方法論の提供について模索していた。こうした背景を持って開発された「7つの原則」は、以下のような特徴がある。



図1 4つの小冊子

第一に、それまでの教授法研究の成果を集約したものである点である。優れた授業実践を実現するための基礎となる概念は「学生を学習に巻き込み参加させること」(Involvement)である。研究グループは、学習への参加に関する先行研究を整理した上で、抽象的になりすぎないレベルの塊にまとめて、原則として示した。原則で示されている7つの内容が、学生の学習成果と高い相関を持つことはフェルドマンによっても示されている⁽¹⁶⁾。「7つの原則」の発表以前においても、大学における教育の質的向上に関する研究はさまざまな形で行なわれていた。しかしながら、それらの研究成果は多くの大学の教員が利用しやすい形でまとめられていなかった。「7つの原則」では、教員をはじめ全ての大学の構成員が実践可能なガイドラインの開発を意図して編集した点が、大きな特徴である。

第二に、「チェックリスト」は自己点検評価シートとして活用できる点である。次節で示すように「チェックリスト」では、1つの原理について10個程度の実践手法が示されている。冊子では、それぞれの実践手法の項目について、次のような5段階で自己評価を行うチェック欄が設けられている。

- 1 よくあてはまる
- 2 あてはまる
- 3 ときどきあてはまる
- 4 あまりあてはまらない
- 5 あてはまらない

利用する教員にとっては、それまで知らなかった実践手法の発見に加えて、自分の長所や短所を

知ることができ、改善に意識的に取り組むべき分野を客観的に認識するための支援となる。本稿で「チェックリスト」と呼ぶ背景も、ここにある。

第三に、「チェックリスト」は、優れた授業実践において学生、教員、大学組織の三者に役割があることを示した点である。授業改善において、教員の役割が重要であることは言うまでもないが、教員のみが取り組むべき役割とするには負担が大きく、熱意とスキルのある一部の教員しか取り組めないだろう。全ての教員が授業改善に取り組めるためには、大学組織の支援が欠かせない。さらに、教員側、大学側が一方向的に学生に働きかけるだけでなく、学生側も授業改善へ参加することで、三者が授業改善に向けて互いに歩み寄りという、全学的な取り組みとしていく必要がある。「チェックリスト」では、7つの原則に沿いながら、特別なスキルを必要としない実践手法が、学生、教員、大学組織の三者に向けて示されている。授業改善において、学生や大学の役割まで示した文献は少なく、本稿が三つの冊子を紹介する意図

もここにある。

3. 「7つの原則」と「チェックリスト」の紹介

以下に「7つの原則」とそれに基づく学生・教員・大学向けの「チェックリスト」を紹介する。

3.1 「7つの原則」の概要

はじめに、「7つの原則」の小冊子を紹介する。全16頁で構成されるこの小冊子は、87年にThe Wingspread Journalの特別版として出版された。内容は、7つの原則の内容を簡潔にまとめた概要、7つの原則の開発理由、7つの原則に沿った各大学の取り組み事例の3部で構成されている。次に示すものは、そのうちの概要の部分の翻訳である。

後掲する3つのチェックリストも含めて、7つの原則に関わる小冊子は、現在でもミネソタ州ウィノナ大学にある7つの原則資料センター(Seven Principles Resource Center)を通じて入手することができる。

資料1 「優れた授業実践のための7つの原則」の概要

以下は、米国高等教育学会とジョンソン財団の支援の下にまとめられた、優れた授業実践のための7つの原則の簡単な紹介です。

1. 教員と学生のコンタクトを促す

授業中や授業時間外に教員と学生が頻繁にコンタクトをとることは、学生の学習への動機づけと学習成果の向上において最も重要な要因の一つです。たとえ数人でも教員との距離が近づくことで、学生は学習への参加が促進され、自分の価値と将来の目標を考える支援になります。

2. 学生間で協力する機会を増やす

学習は一人でやるよりも仲間と協力して取り組む方が、学習の質が向上します。仕事と同様に学習も競争的で孤立してやるよりも、社会的な関係を持って協力的に行うものです。他者と共同で作業を行うことが学習成果を高め、自分の考えや他者の考えを集団で共有することが理解の向上につながります。

3. 能動的に学習させる手法を使う

学習は、スポーツ観戦のように教室で座って教員の話聞き、記憶中心の画一的な試験に対応しているだけでは不十分です。学生は学んだ内容について、自らの過去の経験との関連づけと、日常生活への適用について、口頭・文章で説明できなければなりません。すなわち、学生は学んだ内容を自分のものにしなければなりません。

4. 素早いフィードバックを与える

自分が理解している部分と理解していない部分を明確に認識することで、学習は効率的になります。授業を通じた学力向上を図る上で、学生には学習成果に対する適切なフィードバックが必要です。授業の開始時には、自分の既知の知識や得意な分野を学生が自覚できる支援が必要です。授業中には、試験・課題・発表・実習など学生が自ら取り組む機会を設定し、成果を改善・向上させるアドバイスを受ける必要があります。卒業時、および卒業までの節目の時点で、学生が自身の学習した内容を振り返り、これから学ばなければならないことを自覚し、自分自身を評価する機会が必要です。

5. 学習に要する時間の大切さを強調する

学習には、それに投入する時間と労力が必要です。時間は取り戻すことができません。よって、仕事と同様に学習においても適切な時間管理が決定的に重要です。学生には学習にあたって効果的な時間管理ができるような支援が必要です。必要な時間をきちんと配分することが、学生の学習においても教員の教育においても重要です。大学が学生、教員、執行部、専門職員に対して時間の大切さをいかに語るかが、全体の活動成果を決めるといっても過言ではありません。

6. 学生に高い期待を伝える

高い期待を持って取り組むことで得られるものは大きくなります。これは、基礎学力で劣る学生や精一杯の努力をしない学生であっても、基礎学力が高くやる気にあふれた学生であっても、全ての学生にとって重要なことです。学生に高い学習成果を修めてもらいたいという期待は、教員や大学組織がその期待を持ち続け、実現へ向けた努力を重ねることで現実のものにすることができます。

7. 多様な才能と学習方法を尊重する

学習には様々な方法があります。学生は、各自の多様な才能と学習方法をもって大学へ入学して来ます。セミナーでは優秀な学生でも実験や芸術のクラスでは不器用かもしれません。実務経験の豊富な学生でも理論は苦手かもしれません。それぞれの学生が活躍できるよう多様な才能と学習方法を表現する機会を設ける必要があります。そうすることで、それまで難しかった新しい学習方法にもチャレンジできるようになります。

3.2 教員用チェックリスト

次に、教員用チェックリストを紹介する。教員用チェックリストは、7つの原則が発表された87年の2年後、89年に大学用チェックリストとともに発表された。冊子の冒頭には、チェックリストを開発した目的が教員のサポートであることが述べられて

いる。また、チェックリストの形式をとっているがこの意図は、教員個人を評価するためではなく、授業改善に資するための工夫であることも述べられている。従って、教員が自らの行動を率直に振り返りながら使われることが重要である。

資料2 教員用チェックリスト

よくあてはまる あてはまる ときどきあてはまる あまりあてはまらない あてはまらない

		よくあてはまる	あてはまる	ときどきあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1. 教員と学生のコンタクトを促す						
1	将来の進路について学生にアドバイスをする					
2	学生が研究室に遊びにくる					
3	自分の考え方や過去の経験を学生に話す					
4	学生が主催する行事・勉強会などに参加する					
5	顧問や相談員として学生の課外活動に積極的に関わる					
6	授業開始後2週間までに担当授業の学生の顔と名前を覚える					
7	自分と異なる人種・文化背景の学生の支援に努力する					
8	学生とは先輩・非公式のアドバイザとして接する					
9	学生を自分の専門領域における学会などに連れて行く					
10	学生が問題に直面した際は、解決へ向けた手助けをする					
2. 学生間で協力する機会を増やす						
1	学生に自分の興味や過去の経験をお互いに話すよう求める					
2	授業の予習や試験勉強をクラスメイトと一緒にやるよう促す					
3	学生が共同プロジェクトを行うように働きかける					
4	課題をお互いに評価し合う活動を取り入れる					
5	難しい概念をお互いに説明し合う活動を取り入れる					
6	課題ができたときにお互いにほめる機会を設ける					
7	大事な概念について意見・経験の異なる学生がお互いに話し合う機会を設ける					
8	授業の受講者でグループを作る					
9	学生が参加できる大学の組織の一つ以上所属するように働きかける					
10	他の学生の成績を上げることが、相対的に自分の成績を下げるにつながらないことを学生に伝える					

3. 能動的に学習させる手法を使う						
1	授業の中で学生の課題を発表させる					
2	学生に異なった理論、研究上の知見、あるいは芸術的作品の類似点・相違点を要約させる					
3	授業に関連する学外のイベントや活動に関わるよう求める					
4	学生による調査・自主研究を奨励する					
5	学生に教師・クラスメイトの意見、文献や授業の資料を批判的に検討することを奨励する					
6	具体的で実社会・実生活に結びつく調査・議論・課題を設定する					
7	シミュレーション、ロールプレイ、実験を行う					
8	授業をよりよくするための学生の提案・アイデアを歓迎する					
9	授業に関連するフィールド調査、ボランティア活動、インターンシップを紹介する					
10	学生を研究プロジェクトに参加させる					
4. 素早いフィードバックを与える						
1	小テスト・宿題を課す					
2	学生が自分で答えを合わせられる宿題・問題を用意する					
3	テスト・レポートを1週間以内に返却する					
4	学期の初めのうちは課題の評価・コメントを詳細かつ丁寧に行う					
5	学生に課題の進捗状況を報告させる					
6	試験やレポートは良い点・悪い点をコメントして返却する					
7	学期の初めに事前テストを行う					
8	学生に課題の進捗状況を記録させる					
9	学期の終了後に最終試験の成果について面談をする					
10	欠席した学生に電話・掲示など連絡をする					
5. 学習に要する時間の大切さを強調する						
1	課題にはすぐに取り組むように促す					
2	授業の予習に必要な時間を示す					
3	難しい内容には理解のために必要な学習時間を示す					
4	学生には高い到達目標を立てることをすすめる					
5	プレゼンテーションの際に事前にリハーサルをさせる					
6	日常的な学習、たゆまぬ努力、自分のペースで行うこと、学習の計画性の重要性を強調する					
7	学生に欠席しないことの重要性を説明する					
8	フルタイムで勉強することは、フルタイムで働くことに等しいことを説明する					
9	学習習慣や学習計画の面でうまくいかない学生に会って相談にのる					
10	授業を欠席した場合は、自習などで追いつくことを求める					
6. 学生に高い期待を伝える						
1	学生に一生懸命勉強してほしいと言う					
2	授業で良い成績を取ることの重要性を強調する					
3	学期の開始時に学生に期待することを述べたりシラバスに書く					
4	学生が意欲的な目標の設定を支援できるよう支援する					
5	期限までに課題を提出できなかった場合の処置を説明する					
6	意欲的な学生向けに発展的内容の文献・課題を用意する					
7	学生にたくさん書くことをすすめる					
8	優れた成果をあげた学生は授業でほめる					
9	授業内容を常に改訂する					
10	学期中は授業改善について定期的に学生と議論をする					

7. 多様な才能と学習方法を尊重する						
1	授業が理解できないときはきちんと言うようにすすめる					
2	虚偽の発言、嫌み、冗談、他の学生の妨害行為をやめさせる					
3	多様な学生にあわせて多様な学習活動を用意する					
4	学生の過去の経験にあわせて適切な文献や学習活動を選ぶ					
5	予備知識などが足りない学生用に補習教材・問題を用意する					
6	女性やマイノリティに関する新しい動向を授業に取り入れる					
7	自主的な学習をしたい学生向けの課題・テーマを用意しておく					
8	自ら学習目標を立てる活動、コンピュータを活用した学習をとり入れる					
9	学生が自分の興味・関心に基づいて専攻を決めることを奨励する					
10	学期の初めに学生の学習スタイル、興味・関心、過去の経験を知る努力をする					

3.3 学生用チェックリスト

さらに、学生用のチェックリストを紹介する。学生用のチェックリストは教員用と大学用のチェックリストが発表された89年から3年後の92年に発表された。その冒頭で、開発の目的は、学生が学習に

積極的に関わることの支援であると述べられている。教員用チェックリストと同様、自らの行動を素直に振り返り、自分の強みと弱みを認識し、学習の改善に役立てるために使われるものであり、学生個人を評価するものではないことが述べられている。

資料3 学生用チェックリスト

よくあてはまる あてはまる ときどきあてはまる あまりあてはまらない あてはまらない

1. 教員と学生のコンタクト						
1	一人以上の教員と授業以外の場面で接する機会をつくらうとする					
2	自分の課題・答案・作品について教員にコメントをお願いする					
3	教員の説明・意見に納得ができない時は質問をする					
4	教員と授業の内容に関する話を授業時間外にする					
5	他の担当科目、専門領域など、教員のことを知る努力をする					
6	教員が関わっている研究会などの催しに参加する					
7	履修した授業についての感想・コメントを教員に伝える					
2. 学生間で協力する機会						
1	クラスメイトと友達になるように努めている					
2	授業中に他の学生と一緒に勉強する					
3	友達とグループを作って課題に取り組んだり勉強する					
4	他の学生がわからないことを尋ねてきたら教える					
5	クラスメイトが優れた成果を出したと思った時はそのことを言葉にして言う					
6	自分と意見が異なると思う人と議論をする					
7	自分が得意な分野に関しては他の学生に教える役割を果し、他の学生と知識や技能を共有する					
3. 能動的な学習手法						
1	授業に関してわからないことがある時ははっきりとその旨を言う					
2	授業についていく上で必要なことを教員に質問する					
3	授業の内容と課外での活動を結びつけて考えるようにしている					
4	授業の中で過去の体験や日常の経験が活かせる場面を常に探している					
5	授業に向けて入念な準備をする					
6	授業に関連する文献や研究プロジェクトを探す					
7	授業中は丁寧にノートをとる					

4. 素早いフィードバック						
1	教員からもらった試験、レポート、課題のコメントから自分の良かった点・悪かった点を見つめ直す					
2	わからないことがあればできるだけ早く教員にコメントをもらいにいく					
3	文章を書く時は教員からコメントをもらいながら何度も書き直す					
4	授業や文献の内容でわからないことをリストアップし、友達、教員、自分自身でそれらを検討してみる					
5	クラスメイトからのコメントを尊重し、取り入れ方を慎重に検討する					
6	勉強したことを振り返れるように記録をつけておく					
7	授業で学んだことについて教員と議論をする機会をつくる					
5. 学習に要する時間の大切さ						
1	課題はすぐに取りかかり、正確に行う					
2	課題を提出する前には見直し・推敲を行う					
3	授業でプレゼンテーションをする前には練習をする					
4	履修中の全ての授業について計画通りに勉強する					
5	授業には休まず、遅刻せず出席する					
6	授業についていけないかどうか不安な時は教員に相談する					
7	自分の苦手な内容を意識して、その克服に努める					
6. 高い期待						
1	授業を受ける際に自分の目標を設定する					
2	教員が示す目標を明確に理解できるように調べる					
3	自分の専攻や職業に直接関連しないとしても、授業の内容に興味を持ち続ける努力をする					
4	自分の目標達成に向けて発展的な学習課題を進んでやる					
5	単に成績のために学習しないように気をつけている					
6	どの授業でも最善の努力を尽くして取り組む					
7	勉強を進めるにあたって学内にある施設・人材・資料などあらゆる資源を活用する					
7. 多様な才能と学習方法の尊重						
1	他の学生を困らせる行為をしないよう努めている					
2	教員の授業スタイルにあわせて学習方法を変える					
3	自分の興味や得意な勉強方法を他の学生に話す					
4	学習歴や学力水準の異なる他の学生に敬意を持っていることを示す					
5	教員から少数意見を授業で出してほしいと頼まれた際は協力する					
6	人種差別・性差別や、攻撃的な言動・態度に気づいた時はそのことを言うよう努める					
7	自分と異なる意見について偏見なく考える努力をする					

3.4 大学用チェックリスト

最後に大学用チェックリストを紹介する。上述の通り、大学用チェックリストは89年に教員用のものと同時に発表された。大学用チェックリストは、教員用・学生用で示されているような7つの原則に沿った構成となっていない。7つの原則に依拠しながら、組織の活動を包括する6つの領

域(学習環境、授業実践、カリキュラム、教員、学生支援サービス、施設)について、チェックリストを示している。チェックリストは、学生を学習に巻き込み参加させるために大学組織ができることを示しており、執行部の教育担当者や学務部などの責任者による活用を想定している。

資料4 大学用チェックリスト

よくあてはまる あてはまる ときどきあてはまる あまりあてはまらない あてはまらない

1. 学習環境					
1	学生と教員が授業時間外に面会の機会を持てる				
2	学部や全学の委員会に学生の代表が出席する				
3	学内の研究者の優れた研究成果について学生が知っている				
4	マイノリティの教員・職員・学生を受け入れる				
5	執行部が組織運営に対する学生や教員の貢献度を知っている				
6	大学の出版物は学生・教員・職員の多様な活動を反映している				
7	教員が学生の高い成果を引き出せるよう事務組織が支援する				
8	学長や執行部に教員や学生がコンタクトできる仕組みがある				
9	教員と事務組織が快適なキャンパスづくりに努力する				
10	事務長、学部長、学科長が協力関係を作る				
11	教職員が一生涯懸命働いていることを学生が知っている				
2. 授業実践					
1	履修に際して学生が既知の知識・内容を確認できる				
2	大学が授業と家族サービスや課外活動とのバランスに関する見解を持っている				
3	男性職員と女性職員の所得の差を公表する				
4	大学が卒業生の進路・キャリアを把握している				
5	学生が開講授業を評価し、改善を提案できる機会がある				
6	不可の成績の上限数を大学が決めている				
7	成績評価の明確な基準を教員が持っている				
8	大学は必要に応じて会議で検討中の内容を学生に伝えている				
9	非常勤講師が授業以外の活動に参加している				
10	大学が学生の成長を評価している				
11	スポーツ選手も他の学生と同等の学習を期待されている				
3. カリキュラム					
1	実践的な実務経験、研修の機会を与える科目がある				
2	教員が教養課程の内容を検討し改訂する				
3	教員が専門課程の内容を検討し改訂する				
4	コンピュータを活用した学習など、主体的に学習できる機会がある				
5	新生が参加する特別プログラムがある				
6	学生がインターンシップや就業体験できる機会がある				
7	教員と学生が卒業までに身につける知識・スキル・態度を共有している				
8	学生が自ら専攻を決められる				
9	学生が学際的な専攻に進むことができる				
10	多様な文化の価値を学ぶプログラムに学生が参加している				
11	学生が科目間関係を理解するのに役立つ学習コミュニティやセミナーがある				
4. 教員					
1	学生が会えるよう平日は教員がキャンパスにいる				
2	成績評価は明確な基準に基づいて行う				
3	教員が新たな教授法を試したり支援を受ける時間的余裕がある				
4	教員が授業の成果についてフィードバックを受けたり与えたりする				
5	学外でのコンサルタント活動やベンチャー企業経営等に関する制限が議論されている				
6	教員は学問的な指導を真剣に行っている				
7	定期昇給が教育成果と関連している				
8	教員が学生課の職員と協力して働いている				
9	大学が、教員の労働時間が合法的な範囲におさまるよう指導をする				
10	教員が長期計画、予算、人事など重要な意思決定に参加する				
11	執行部の教育への貢献を教員が評価している				

5. 学生支援サービス						
1	学生のような相談にカウンセリングサービスが対応する					
2	学生が論文・レポートの執筆指導を受けられるサービスを提供する					
3	学生向けのタイムマネジメントセミナーを行う					
4	成績不振の学生に学習支援を行うプログラムを提供する					
5	学生課、学務課、学生自治会が協力・協同してオリエンテーションプログラムを実施する					
6	学生が他の学生のチューター、アドバイザー、リソース・パーソンとして活躍している					
7	学生が財政的援助に関して専門家から支援を受けられる					
8	教育目標が学生の行動目標で表現されている					
9	学生が在学中は同一のアドバイザーから指導を受けられる					
10	大学が学生の多様性に対応できるよう教員・職員・学生に研修を行う					
11	奨学金は期限までに申し込んだ学生には授業開始時に支給されている					
6. 施設						
1	教室の机・椅子が可動式である					
2	学生と教員が面会できるラウンジなどが整備されている					
3	静かで集中できる学習スペースがある					
4	娯楽施設や運動施設が夜間、週末も開いている					
5	食堂が日中・夜間通じて開いている					
6	キャンパスに学生が自由に使えるビデオ視聴室、実験室、芸術活動用の施設がある					
7	大学のコンピュータを利用できる					
8	学生、教員、職員が必要な数だけ備えた駐車場がある					
9	日中・夜間に使用できる公共交通機関がある					
10	学期中は図書館が週末・夜間も利用可能である					
11	夜間コースの学生のために事務室が夜間も開いている					

4. おわりに

本稿では、7つの原則とその実践手法をまとめた学生、教員、大学組織用のチェックリストを紹介した。80年代後半に発表され、全米で活用されたこれらの開発物は、現在でも様々な形で活用されている。特に、実践手法は、各大学の各現場レベルで無数あるだろう。そのため、チェックリストの内容を各大学の状況や課題にあわせて柔軟に変更し、独自にチェックリストを作っている大学も少なくない。チェックリストに示された内容は、それぞれ10個前後であるが、具体的な実践手法の事例は豊富であるほど利用しやすいものになるだろう。

実践手法は現場レベルで蓄積される暗黙知となっているケースが多く、文献としてまとめられているものは非常に少ない。しかしながら近年では、7つの原則に基づく実践手法を学内で独自にまとめ、ウェブサイトで公開する大学がある。中井らはこの点に注目し、ウェブサイトで公開されている実践手法をレビューしてまとめている⁽¹⁷⁾。そこでは、それぞれの原理について27個から45個の実践手法が紹介

されている。

7つの原則の取り組みの特徴は、何が大事かの説明ではなく、どうすればよいかを示した点である。これは、日本においても現場のニーズに合致するものだろう。今後、授業改善の支援を進める上で、7つの原則の取り組みが参考になるだろう。

注

- (1) McKeachie, W. McKeachie's Teaching Tips: Strategies, Research, and Theory for College and University Teachers, Houghton Mifflin Company, 1999.
- (2) Davis, B. Tools for Teaching, Jossey-Bass, 1993.
- (3) 香取草之助監訳『授業をどうする！—カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』東海大学出版会 1995
- (4) バーバラ・グロス・デイビス著 香取草之助監訳 光澤舜明・安岡高志・吉川政夫訳『授業の道具箱』東海大学出版会 2002

- (5) 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹『成長するティップス先生 - 授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部 2001
- (6) 長崎大学『FDハンドブック(第1巻~第11巻)』2001
- (7) 徳島大学大学開放実践センター『FD推進ハンドブック』2002
- (8) 愛媛大学大学教育総合センター教育システム開発部『もっと!! 授業を良くするために』2004
- (9) Chickering, A. and Gamson, Z. "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", AAHE Bulletin, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education 1987.
- (10) Chickering, A. and Gamson, Z. "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", The Wingspread Journal Special Section, Winona State University, 1987.
- (11) Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. "Faculty Inventory", the Seven Principle Resource Center, Winona State University, 1989.
- (12) Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. "Institutional Inventory", the Seven Principle Resource Center, Winona State University, 1989.
- (13) Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. "Student Inventory", the Seven Principle Resource Center, Winona State University, 1992.
- (14) Poulsen, S. "Making the Best Use of the Seven Principles and the Faculty and Institutional Inventories", New Directions for Teaching and Learning, No.47, 1991, pp.27-35.
- (15) Gamson, Z. "A Brief History of the Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", New Directions for Teaching and Learning, No.47, 1991, pp.5-12.
- (16) Feldman, K. "Identifying Exemplary Teachers and Teaching: Evidence from Student Ratings" in Perry, P. and Smart, J. (Eds.), Effective Teaching in Higher Education: Research and Practice, Agathon Press, 1997.
- (17) 中井俊樹・中島英博「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号 2005